

こんにちは! 「国際バカロレア (IB) の教育効果等に関する調査研究チーム」の教員調査班です。私たちは、令和6年度(2024年)に公立の3つのIBDP校にて事例校調査を実施いたしました。そこで得られた先生方のインタビューデータをもとに、IB導入による学びと気づきに関する発言をいくつかピックアップし、こちらのリーフレットにまとめました。IB校、non IB校問わず参考になれば幸いです。

※調査の詳細については令和6年度の成果報告書をご覧ください。インタビューは匿名性を配慮し、一部表現を編集しています。

アプローチの変化

「子ども達が疑問に思ったりとか、要望に対して、今までの学校だったら、『規則だから駄目ですよ』というようなこともあったと思いますけど、それじゃ納得しないんですね、こここの子どもたちは。なので、それを、一緒に考えるとか(中略)子どもと一緒に考えていくっていうことをしていこうねっていうのは、言ってますので、そういうところが、先生方も、変わってきたんじゃないかなと思います。」C校教員

「すごく新しいなと思ったのは、概念っていうのを軸に持つてしてたってところで、日本だったら、教科があって、だと思うんですけど、じゃなくて、中心に概念があって、それを獲得するための教科っていうような考え方がある。すごく自分の中には新鮮で、という感じですね。それを勉強する方法として、やっぱり、今は、いろんな先進校の事例を見学させたり、勉強させていただいたり、本を読んだり、という感じですね。」C校教員

もともとの教育実践との親和性、そしてその言語化

「総合的な探究の時間のノウハウとIBってすごく実はフィットするなっていうのはすごい感じですね。」C校教員

「評価やATLなど、名前が付いているので、生徒にもすごく説明しやすい、っていうのはありますね。」C校教員

「IBの場合だと、何かテーマを設定するときに、こういう要素を必ず入れてくださいねっていう条件がいろいろあるので、テーマが結構つくりやすいというか、明確にしやすいというのもあります」A校教員

IBをnonIBの文脈に活かす

「IBが入ることによって、観点別のループリックとか、観点がどうとかいう話が、展開されるようになりました。IBのループリックを土台にして普通科のループリック作ることもしています。」C校教員

「今、新課程で歴史総合、それから、あとは世界史探究って科目が始まっているんですが、そちらへの応用は随分できるなっていう印象があります。具体的には、ヒストリーなんかでは特に史料批判の方法が示されています。史料の性格を明確にするという点では、非常に実際の普通科のほうの授業の中でも応用可能だとすごく思っているところですね。」B校教員

「教員もすごくプロフェッショナルであることを求められているなというのを感じていて。どういうふうにやっていくものなんだよっていうのをうまく教えることよりも、私たちが、どっちかというと、師匠じゃないんですけど、面白い壁をつくっていって、そこに取り組んでみたいとか、もっと深めてみたいっていうのをいかに与えていくかっていうところがすごく重要なだなというふうに思っていて。」A校教員

「フレームワークを獲得していれば、そこに入れる内容で、より議論だったりとか、あるいは、文章を書くときも内容のところを見ることができるっていうところで、問い合わせに対する回答の形、その形ってものを明確に型を教えることって重要なんだなっていうことを、IBですごく学んだ」B校教員

「自分で言語化できなかったものが、幾つか、ちゃんと決まった言語としてあるっていうののすり合わせができる、自分がすっきりする」C校教員

「IBの導入による大きな変化は正直ありません。IBの考え方や近いような授業っていうのを、今まで自分の科目で展開をしてきてるので、それがちゃんと整理されて、自由にやらせてもらっているので、自分自身のウェルビーイングも高い状態だと感じます。」A校教員

「評価っていうのは明確化されているので、なんかあらためて学習指導要領とかもよく読むようになったし、となると、学習指導要領でも主体的なとか探究的なっていうのがいわれてて、そこはIBとも通ずるところだと思うので。そういうペーパーだけじゃなくて、いろんなもので生徒を見取るというか、それを通して、どういう生徒になってほしいかっていうのは、ちょっと変わってきたかなという気はします。」C校教員

「IBとnon IBとの授業の行き来があるから先生の資質も高まる」B校校長